

NPO 法人 大友氏顕彰会発足 10 周年記念
令和 3 年度 大友氏顕彰フォーラム in 日田 報告

主催：NPO 法人大友氏顕彰会・NHK 大河ドラマ「大友宗麟」誘致推進協議会
後援：大分県・大分県教育委員会、日田市・日田市教育委員会、大分合同新聞社、
西日本新聞社大分総局、NHK 大分放送局、KCV コミュニケーションズ
日時：令和 4 年 3 月 21 日(月・祝) 13:30~16:10
会場：パトリア日田小ホール



ここ数日、コロナのオミクロン株感染が落ち着いてきて支障なく開催にこぎつけた。それでも受付時には検温・手消毒・氏名記入を参加者をお願いした。総参加数は 83 名。大分からのバスツアーは 18 名、半分近くは一般参加者である。顕彰会や推進協議会会員の参加がもう少しほしいところだ。司会は藤田賢治大友氏顕彰会幹事が担当した。

来賓は原田啓介日田市長(右上)、大分県西部振興局河野圭史局長(右下)。河野局長は広瀬知事の言葉を代読した。オープニングは会員の原川二郎氏の「日田市歌」「大友宗麟」「コツコツ節」。

主催者の牧理事長の挨拶の後、原田市長、河野局長の挨拶をいただいた。いずれも中世日田の歴史があまり知られておらず、大友氏との関係がこの場で明らかになることに期待するとともに、近代教育に大きな影響を与えた咸宜園の講演にも触れた。



【座談会】「中世日田氏と大友氏について」 13:45~15:10

出席者／牧 達夫・大友氏顕彰会理事長並びに大河ドラマ推進協会長(コーディネーター)
溝田直己・日田市教育庁咸宜園教育研究センター
若杉孝宏・大友氏顕彰会副理事長並びに大河ドラマ推進協事務局長

■大蔵日田氏の出自

まず、大蔵日田氏の概要説明。平安から室町初期まで 600 年ちかく日田地方に君臨した氏族。日田氏は大蔵姓であり、その祖はさまざまな説があり、筑前の大蔵氏との違いを溝田氏が説明。当時の武家は血脈より“家”を大事にし、当主の名前は「通字」といって代々同じ漢字を使う習慣があった。大蔵日田氏は「永」、筑前の大蔵氏は「種」。よって祖は違うのではないかと(推測)。

■大蔵日田氏と文化財

大蔵日田氏は平安後期～鎌倉初期の慈眼山文化と南北朝期の岳林寺文化とがあり、いずれも仏教文化の遺産である。当時は末法思想の影響で古代仏教は支配者層のものだったがこの時代に庶民にまで



国重文木造四天王立像



多聞天

廣目天

増長天

持国天



国重文 木造十一面観音立像



広がった。中世史は合戦に目が行きがちだが、宗教観なしには語れない。特に大友氏は禅宗と切り離せず、今後はこれを意識し勉強していく必要がある。



■大蔵永季と相撲の神様日田神社

大蔵日田氏の初代は永季と言い“ひたどん”と呼ばれ相撲の神様として日田市民に親しまれている。彼を祀った日田神社が慈眼山麓に鎮座し、日本相撲協会九州場所(昭和 32 年～)の際に奉納された歴代横綱・大関の玉垣が数基残されている。戦前の双葉山時代があるのに栃若時代がないのが寂しい。

これは夜明地区の有主社にあったものを模写したと伝わる。



現在、当時の模様を描いた絵が大原八幡宮に残されている。



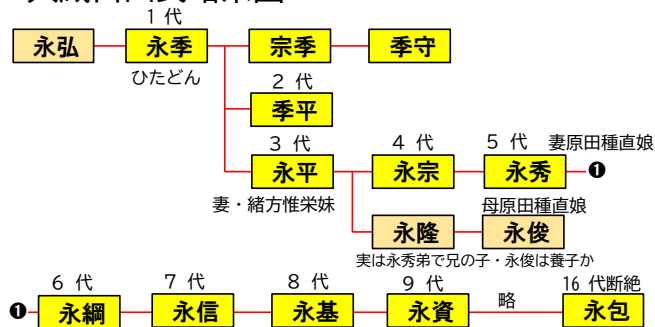
■大蔵日田氏と筑前の大蔵原田氏

大蔵日田氏と筑前大蔵原田氏が平安末期に姻戚関係となったが、日田氏の通字は「永」を踏襲した。

■大蔵永秀(5代)は源平争乱で平家軍を敵にした

永秀の祖母は緒方三郎惟栄の妹、妻は原田種直の娘。原田種直は平氏の主だった家人。種直は永秀に平家方につくよう要請。それを断ると種直は激怒、再三国境の櫛崎城に攻め寄せるも永秀は撃退。その後緒方惟栄に与し平家を大宰府から追い落した。これらの戦功により、永秀は源頼朝より日田荘、生葉郡等の所領を安堵され、名実ともに緒方惟栄らと肩を並べた。※先日、原田種直の居城「岩戸(門)城(左下)」と大蔵永秀の日田夜明の「櫛崎城(右下)」を訪れ写真で紹介した。

大蔵日田氏略系図



■源平合戦で源範頼軍豊後上陸

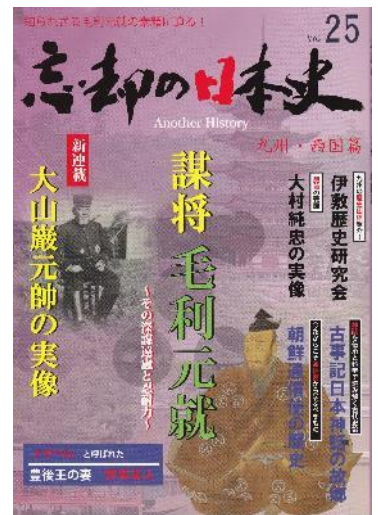
元暦 2 年 1 月、源範頼は下関まで行って渡海できず立ち往生。頼朝に相談、緒方惟栄から船 82 艘を与えられ 2 月 1 日豊後に上陸。その日「芦屋浦」で原田種直から迎撃されたがこれを破り大宰府まで進軍、平家軍を四国に遁走させた。そして 3 月 24 日、平氏は壇ノ浦の戦いで源義経により滅亡した。この範頼豊後上陸の史実はあまり知られておらず、壇ノ浦で義経が勝利した裏には範頼

の功績があった。もっと知らせる必要がある。※豊後に“芦屋浦”などなく、これから真実を突きとめる使命が与えられた。

■豊後に上陸した「鎌倉殿の13人」

今話題のNHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」のうち、北条義時はじめ登場人物のほとんどが範頼に従って豊後に来ている。大友能直の養父・中原親能然り。ドラマでは割愛されそうなので取り上げ紹介した。さらに九州山口で発行されている『忘却の日本史(26号)』にこの考察文を寄稿したので併せて紹介した。

26号 4月中旬に発売予定 乞うご期待！



■大蔵日田氏、蒙古襲来での活躍

文永11年(1274)10月、蒙古軍が博多湾に来襲。少貳資能と大友頼泰の両指揮官の下に九州の御家人で迎え撃つ。日田永基は姪浜や百道原の合戦の勲功により国東安岐郷300町、弘永名30町・弁府10町を賜る。その後の弘安4年(1281)、元は再び襲来。日本は文永の役を教訓に石塁を築いた。豊後は香椎一帯、日田氏は石築地228mを建設した。また、日田永資は左衛門督・従五位下に任じられ筑前三奈木荘を賜った。※『豊後日田氏の興亡』著者：木藪正道より

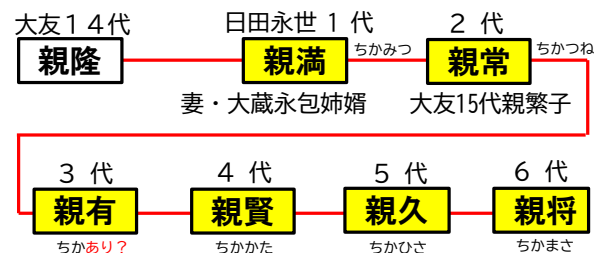
■南北朝・室町期の日田氏

この時代、各家は家の存続をかけ南北に分かれ戦った。日田氏も二派に分かれこの危機を乗り切った。幕府安定期の4代将軍足利義持(1395～)の將軍奉公衆(側近・直屬軍)に大友一族から戸次・田原・吉弘氏が選ばれており、国人衆からは日田氏(永息か)と佐伯氏が選ばれた。將軍側近だが在京の必要はなかった(溝田氏)。

大友日田氏略系図

■大蔵姓日田氏の滅亡と大友姓日田氏の誕生

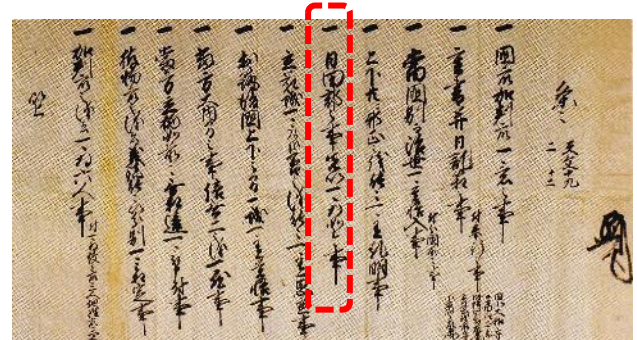
14代永息の跡目争いから大友氏の干渉を招き、大友氏14代親隆の子・親満が大蔵永包の姉婿の関係で日田氏を継ぐ。しかし、大友日田氏6代親将の政治が乱れ家臣の訴状により日田親将は大友義鑑から討伐された。わずか百年弱の治世に終わった。



■日田郡老政治(約50年)と城

大友義鑑は大蔵氏の分流の郡老6名(坂本・財津・羽野・石松・堤・高瀬)と目代2名(佐藤・瀬(世)戸口)を任命して日田統治を任せた。これは非常にうまく機能したことが1530年2月、二階崩れの変で義鑑が死ぬ前に嫡子・義鎮(宗麟)に残した遺言状に

「日田郡のことは今のままたるべき事」と記されていることで証明される。



■戦国期、日田氏の活躍と大友氏の拠点

大友宗麟の両筑経営と毛利との博多争奪戦において国境の日田は、高良山の最前線基地のベースキャンプでもあった。しかし、宗麟の日田在陣の城は分かっておらず、残されたわずかな記録で推測。当時の高井岳城(左の写真)の守将の堤小次郎への加冠状やアルメイダの訪問の記述などから櫛崎城の二つが候補地として挙げた。

また、立花城争奪戦にも言及し、福岡県那珂川市にある岩戸(門)城を紹介した。この城は平安時代原田氏の居城であり平家軍の拠点でもあった。



宗麟も立花城争奪戦にはこの城に大友軍を集結させた。高良山と言ひ、宗麟が重視した城は交通の要衝にあることが分かる。

■日田郡境の警備と問注所氏

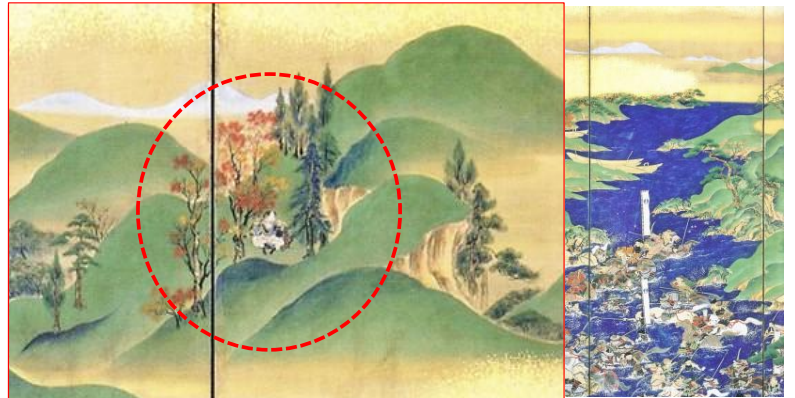
日田郡老諸氏は隣接する筑後の星野氏や黒木氏、筑前の秋月氏らとは度々衝突する。筑後の問注所氏と五条氏のみはずっと大友方だったが、問注所分家の鑑則が一時的に敵対した。「鎌倉殿の13人」に出てくる三善康信は問注所氏の祖で、大友氏の祖である中原親能とは頼朝挙兵時共に在京し、その後康信は問注所別当として、親能は京都守護職として幕府創設に貢献した。康信の子・康俊が役職名の“問注所”を苗字とし、浮羽(葉)郡に所領を得て400年後の義統時代まで大友氏の被官として続いた。

■日向合戦のエピソードと田北紹鉄の乱

キリスト教国家建設を夢見た宗麟は日向合戦で島津に大敗した。その模様を描いた合戦屏風が京都の相国寺に残されており、無常を感じた武将が笛を吹く様が描かれている。これが実在した津江山城守鑑盛だったことが、島津氏側の記録と『日田記』で確認できた。絵と文字が一致すれば史実として認めていいだろう。

また、田北紹鉄の謀叛事件は当時から譏言説があったが仕方なく抵抗した。そして筑前に落ちる途中、大山の松原で財津や堤・坂本などの日田衆に討ち取られた。その供養塔が国道212号田北トンネル上にあり、田北一族の末裔(若杉)として2、3年に一度花を手向けている。

耳川(高城川)合戦図屏風、相国寺所蔵



■豊薩戦争と日田郡老の終焉

1586年末、豊後を蹂躪した島津軍は日田にも侵入してきた。しかしその日、日田盆地は雲海に包まれ湖と見間違った島津軍は引き上げた。1592年の文禄の役には大友軍として参陣した日田軍士600人(郎党まで含む)は大友軍最多だった。大友義統は敵前逃亡という汚名を着せられ、豊後を改易され400年の歴史の幕を閉じた。

主だった大友家臣団が豊後を離れる中、日田郡老の子孫の多くは地元に残り、名前で分かるように、現在多くの子孫が日田市民として暮らしている。

日田は地理的に北部九州の中心にあり、政治経済の重要性は江戸時代においても変わらず、幕府領として福岡藩や肥後藩など大藩ににらみを利かせた。また経済においては「日田金」と呼ばれるように豪商が生まれて新田開発や困窮する二豊各藩の財政に寄与した。

なお、溝田氏には各項目で専門家として貴重な助言をいただいたことに感謝申し上げます。

この座談会では次の資料を参考にした。この報告書は若杉孝宏が担当した。

『豊後国志』、『豊後国日田郡司職次第』、『豊西記』、『日田記』、『大友家文書録』、『日田郡誌』、『吾妻鏡』、『完訳フロイスの日本史』、『日田氏の興亡』、『日田市三十年史』、『大友氏の風景』、『日田の城跡を歩く』、『日田市の歴史と文化財』、『大分県の歴史』、『日田の歴史研究』、『日田の歴史を歩く』

【講演】「廣瀬淡窓と咸宜園について」 15:15～16:10

講師／若杉竜太・日田市教育庁咸宜園教育研究センター

日田での歴史講演においては、近世日本最大の私塾「咸宜園」の教育システムを外すことはできない。ましてや数年前から全国の有名私塾と連携し『近世日本の教育遺産群』としてユネスコ世界遺産委員会への申請を目指している。そこで今回、担当職員である若杉竜太氏にお願いした。以下彼の発言・レジュメから抜粋した。

私は3年前に咸宜園の担当になった。ここに来て発見したのは、自分の高祖父(田北輝太郎)が塾生だったこと。酒好きは自分と同じで高祖父がここに呼んでくれた、と思っている。それはさておき、咸宜園は廣瀬淡窓によって文化4年(1807)に開塾した「桂林園」がその前身である。



[1]塾主・廣瀬淡窓

(1) 生涯 名は簡・建、通称は求馬、字は廉卿・子基、号は淡窓・苓陽、諱は文玄先生。

天明2年(1782)、豆田の商家「博多屋」長男として出生。7歳で「四書」、10歳で漢詩を学び、16歳で福岡の亀井塾入塾、18歳で退塾。24歳・長福寺学寮で塾を開く。26歳・桂林園を建築し移転。36歳で咸宜園に移築・開塾した。49歳・弟旭荘に塾主を譲る。55歳・再び塾主。75歳(安政3・1856年)病没、長生園に葬られる。

(2) 三つの業績

- ①教育者 近世最大の私塾創設、独自の教育システム導入(智・情・意(心)の全てを養う)
- ②漢詩人 「菅茶山」「頼山陽」と並ぶ江戸後期三大漢詩人
- ③儒学者 「敬天思想」:天を畏れ敬い、正しいことをすれば天に報われる

(3) 評価

- ①豊後の三賢 国東の三浦梅園(条理学)、日出の帆足万里(窮理学)
- ②幕府から永世苗字帯刀の恩命(61歳)

[2]咸宜園の教育

(1) 私塾「咸宜園」近世最大規模の私塾

①存続期間 文化2年(1805)～明治30年(1897)までの92年間

歴代塾主 第一代・廣瀬淡窓、二代・廣瀬旭荘、三代・廣瀬青邨、四代・廣瀬林外、五代・唐川即定、六代・園田鷹城、七代・村上姑南、八代・廣瀬濠田、九代・諫山菽邨、十代・勝屋明浜

②塾生数 淡窓の塾主期間 約3,000名、92年間4,900名(入門簿より)

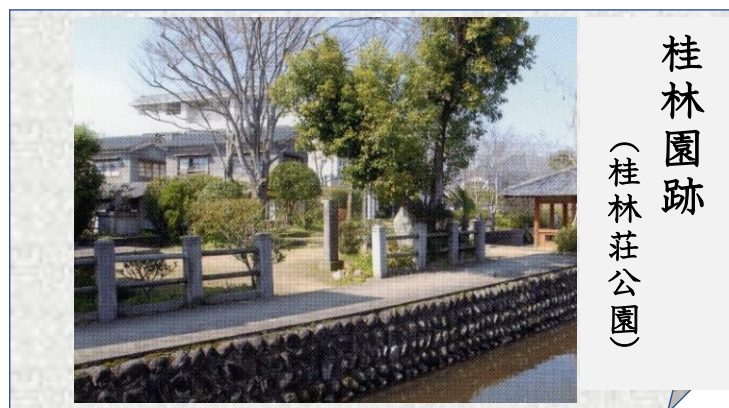
在塾生の最高位数 約230名(嘉永5・1852年)

在塾生の出身国 全国63カ国(下野・上総・伊賀・隠岐・大隅除く)

(2) 教育の特色

①平等主義「三奪法」入門時に学歴・年齢・身分を奪うこと

1.「咸宜園」塾主 廣瀬淡窓



- ②実力主義「月旦評」毎月の成績表、19 等級
- ③実学主義「職任制」塾生全員に職務分担、規約・塾則
- ④個性尊重「咸宜(ことごとくよろし)」
- ⑤情操教育 詩作、放学、夜話

(3) 主な門下生(大分県関係)

〔儒学者・医者・僧侶〕 中島子玉(佐伯藩)・竹内淡軒(府内藩)・辛島春帆(中津藩)ほか多くを輩出
 〔政治家・官僚〕 長三洲(日田、文部大丞)、清浦奎吾(内閣総理大臣)ほか群馬・岩手県知事や学者ほか数名

〔画家〕 帆足杏雨(戸次)、平野五岳(日田、三絶僧)、高木豊水(日田、小倉藩絵師)

〔その他〕 大村益次郎(兵学者)、上野彦馬(化学者・写真家)、高野長英(蘭学者)、朝吹英二(下毛、三井の四天王)

(4) 教育の影響

- 近代教育の先駆的教育システムで多くの私塾や「学制」に影響を与えた
- 近代日本を担うあらゆる分野で活躍する人材を育成。地域のリーダーを輩出

[3]近世最大規模の私塾であった 7 つの理由

(1) 近世の教育環境

- ①江戸時代後期は庶民の教育熱が高まり寺子屋・私塾が普及。それに伴い識字率の向上により出版文化が花開く
- ②幕末維新期に訪れた外国人の日本の教育普及に高評価

(2) 近世日田の歴史的背景と繁栄

- ①古くから北部九州の交通の要衝
- ②近世は幕府直轄地(天領日田)。九州の政治・経済・文化の中心地
- ③比較的自由な雰囲気

(3) 日田の自然環境

- ①山間部の小都市(九州の小京都)
- ②小盆地で豊かな自然(塾生が周辺の山野や神社仏閣めぐりで心身のリフレッシュ)

(4) 淡窓の人間的魅力・教育者の資質

- ① 謹厳篤実／優しく温厚・自省と修養の生涯
- ② 教育は自分の天職／塾生の才能個性を生かす教育・運営の巧みさ
- ③ 塾生とのふれあい／配慮と思いやり・塾生との談話(夜話)や山行き
- ④ 漢詩教育は情操を養う／「詩は人の情を詠うもの」
- ⑤ 偏らぬ教育／学派や学説にこだわらない態度・自主的態度・本文主義・実学主義・
- ⑥ 全国的評価／永世苗字帯刀の恩命・大村藩および府内藩から招聘

(5) 咸宜園が近世最大規模の私塾となった理由

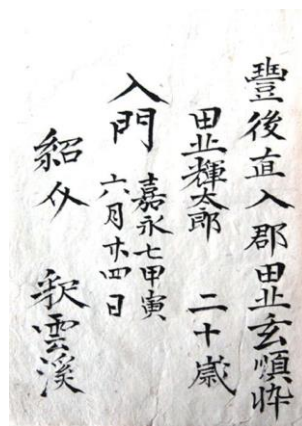
- ①三奪法 ②月旦評 ③職任制

(6) 廣瀬家の支援

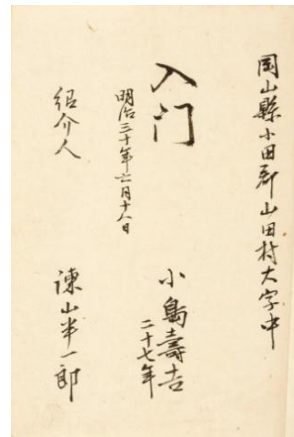
- ①商家「博多屋」廣瀬家の嫡男であるが経営は弟に任せ塾の経営・財政面で支援を請うた。

(7) 全国的ネットワーク

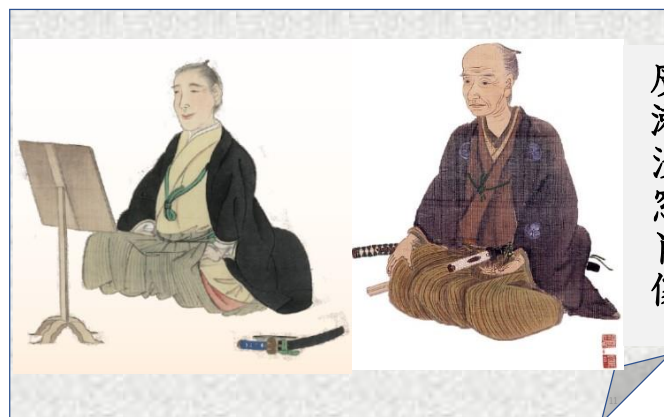
- ①入門簿には紹介者(身元保証人)の記載を必要とした
- ②入門は紹介者が原則、当初は淡窓の友人知人から始まる。特に僧侶は地域を超えた同じ宗派のネットワークが生きた



田北輝太郎

小島壽吉
(最後の門下生)

1.「咸宜園」塾主 廣瀬淡窓



廣瀬淡窓肖像

[4]「世界文化遺産登録」推進運動

○参加者の声

日田の中世史は地元の方々にもあまり知られておらず、参加者の中には熱心にメモを取る方や、先祖の名前が出て来て初めて存在を知り感動する方もいた。なお、日田在住の方が43人、大分市が29人、ほか玖珠町や臼杵・津久見・由布市の方が8人、福岡県からも3名、合計83人の参加があった。また、西日本新聞社がその模様を3月31日付で紹介。さらに地元のKCVコミュニケーションズが当日の模様を収録し5月に放送するという。放送日時は(5月中予定)確定し次第ホームページにアップするので観ていただきたい。



観客席の撮影は始まる前に報告者(若杉)が撮ったため観客数が少なめ。